

series Salamander in the circle

リ・コンストラクション

第五部

第二十八章

in the fog

— 霧の中 —

峯村 明

目次

in the fog	
お願い	2
登場人物	3
in the fog	5
あとがき	17
奥付	18

in the fog

お願い

ダウンロードありがとうございます！

さて、ただ今『リ・コンストラクション』をリライト中なわけですが、

第二十三章・初版(2025年7/31発行)～最終章・初版(2026年2/15発行)をお持ちの方は、そちらを処分していただき、とにかく、無視してください！

リライト版は初版とはかなり違う展開になっていますので。

(2026年7/25以降発行が新しい版です)

26年08月10日記

登場人物

桧山 健	H&L財団・財務部門勤務
ひろ	健の妻
真	健・ひろ夫妻の子
A.パウジーニ	桧山健の個人秘書
河合 ヤスオ	H&L財団・スポーツ部門で修行中の学生

cast28.JPG

in the fog

276.

ひとまず——健は帰路についた。職場に戻らなければならないし、家に帰らなければならない。ひろには昨夜から一度も連絡をいれてなかったことに気がついて、おそろおそろ携帯電話を開けてみて——血の気が引いた。電話もメールも、なにも届いていない

電波の圏外だから？　　と思い、Xに尋ねてみると、やはり彼のマスターと連絡がとれないという。とはいえ、今時、圏外だからとは思えない。アルチニアが関係しているのかもしれない。秘密の隠れ家を誰にも知られたくないはずだ。

「少し休まれては？」、とX。「帰り道、わかる？」「車のナビが覚えてます。大丈夫」「ああ、そうか」「あの」「ん？」「マスターには、昨夜のこと、どう説明したらいいでしょう」「.....巨人のこと？」「.....ええ」

イリチャの力でXの記憶を書き換えるという手もあった。が、偽りの記憶を持つボディーガードではマスターを守ることは、できないだろう。

「ありのままに」「.....よろしいんですか？」「かまわんさ」

かまわないどころか、アルチニアという女性の存在はサーディクにとってどういう意味があるのだろう、と健は考えていた。サーディクの母国、ポルタアウレアの地下にある巨大な金鉱は、かつてアルチニアが属した『化学者の館』が関わっていると思われるからだ。

そんなことを考えはじめると、ひと休みするどころか、逆に目が冴えてきてしまった。

＊

早朝。Xが運転するタクシーは、前日ペイリーを拾った病院に到着。ガソリンは満タンにしておいたし、ナビの走行記録はまっさらにして、そっと返しておく。
健のポルシェは駐車場でおとなしくドライバーを待っていた。

277.

ブリュッセルの市街地を一望できる小高い丘、丈高い樹木のとっぺんにカラスが止まって、あたりを睥睨^{へいげい}している。
大きく立派な姿は堂々と禍々しく、まるで死神の使いのようだ。

＊

健は始業時間前にオフィスに現れた。そして伊達男パウジーニがげっそりとやつれて
いるのに驚いた。

「どうしたんだ、パウジーニさん！！」

「どうしたもこうしたも！！ あんまりですよ、ボス！！ かれこれ十二時間も連絡が
とれないなんて！！ いったいなにしてらしたんですか！！？」

「わ、わなかった……携帯電話が使えなかったんだ、込み入った事情があって……」

「……込み入った事情があった、のですね？」

昨夜来、一睡もしていないパウジーニは、少し皮肉な口調で聞き返す。桧山は「そう
なんだよ」というしかない。

「ボス、私はどんな事情か、なんて、細かいことを知る必要はありません。しかしです
ね、私はあなたの秘書なんですよ、あなたの居所がつかめないというのは内外いずれに
も、ひじょうにまずいことなのです、あなたは一個人ではないのです！！」

やつれた顔で切々と訴える彼に、健は「わかった。二度としません」と言った。

「そうだな……パウジーニさん、あなたになら、オレが昨夜誰と会ってどこでなにをし
ていたか、知っていてもらってもかまわないが……」

パウジーニは両手の平を相手に向けて首を振った。

「ボス、私はあなたを信じています。ですから奥様には急な出張だと伝えました。間違っ
てはおりませんか？」彼の語気は挑発的だった。

「まあ、完全に私用だったから出張というには語弊があるけど」秘書の顔を立てて、「出
張ということにしておこう」

パウジーニは心痛のあまりひきつっていた顔を控えめにほころばせ、肩をすくめた。
「恐れ入ります……ところで……」彼はつと執務室の奥の方をみた。

＊

「こいつ——！ どうしてここにいるんだ——！？」

「昨夜あなたが出かけられた後、ひとりでね。奥様にはご子息がひとりで来てしまったの
で私がお預かりします、と」仮眠室の簡易ベッドで真はうとうとしていた。

「あれを……」パウジーニはテーブルを指差す。「守るんだ、と言っていました。ママには
内緒のプレゼントだから、と」

そこには大きな花束が置かれている。かたわらに画用紙をクレヨンで塗り分けた、大
胆な構図と色使いのバースデーカード。誰もいない時間帯に真がこっそりここへ通って
せっせと画いていたものだ。

健は髪に指を突っ込んでかきあげながらうめいた。「そうだった——！ 花は自宅じゃ
なくてここへ届けてもらうことになってたし、カードもここにおいてあった——！」

「びっくりさせたいからママに秘密にしておこうとパパと約束したんですって？ いい
ですねえ……私にもこんな息子がいたらなあと思いますよ」

健は笑った。「一筋縄じゃあ、いかないやつだぞ」

278.

前庭の石造りの噴水の縁に腰をおろし、ひろは水面を見ている。

ひざ上までのトレーニングパンツとランニングシューズ。以前は後頭部の高いところで
結んでいたポニーテールだったが、その格好で昼間街なかをうろうろして、ある日おま

わりさんに呼び止められた。

曰く、「ママや先生はきみがここにいることを知っているのかい？」どうやら中学生に間違われたらしいのだ。

あとでその話を聞いた健は面白がって、ひろの不機嫌に油を注いだ。「しつれいしちゃうわ！　ばかにしてるわ！」

それ以来、朝のランニングの時にもメイクをし、髪はうなじの辺りで束ねて少しでも大人っぽくみせようとしている。

健は「オレはそういうの、好きじゃない」といい、ひろ本人もばかばかしいと思うのだが、ローティーンに見られたことは彼女のプライドをいちじるしく、傷つけていた。

（私には五歳の子どもがいるし！！　夫だっているのよ！！　結婚暦六年！　二十三歳の熟れた人妻なのよ！！　なんで今更、中学生に見られなきゃならないのよ！！）

自分でもどうかしていると思う。アデレードにいたころは平和だった。今は.....あまり平和じゃない。

水面に映った貌は、自分ではないようだった。

石畳を歩く靴音に、ひろは顔をあげた。「.....河合くん.....」

河合ヤスオは、愛想よく顔をくずして、よう、と片手を振った。「おめえは、早ええなあ、あいかわらず」

「.....うん」

「なんだ？　なんかお疲れ？」

昨夜疲れるようなことがあったんだろ、とかなんとか軽口をたたこうとしたが、どうもそんな雰囲気ではない。「なんか.....、あったのかい？」

「.....ううん.....」

「おいひろ.....言ってみな、真のことか？　それとも旦那か？」

「なんでもないわよ」

「なんでもねえって、おめえ.....」

ひろは手で携帯電話をもてあそんでいる。「ゆうべ.....」

「.....おお」

「寝そびれちゃったの、寝不足なのよ、それだけ。河合くんはこんな朝早くに、なにしてるの？」

「おお、徹夜あけてやつさ。アパート帰ってひと眠りして、それからゼミの合宿に出かけるんだ。半学生はつらいね、ま、H&Lの奨学金さまさま、だけどさ、あはは」

河合の学業についてひろは以前聞いたことがあるが、なにやらこむづかしい単語ばか

りで、正直さっぱりだった。しかし、とにかく、彼はアスリートのトレーナーを目指し、大学で研鑽を積んでいる、いわば修行中の身だ

「なあ、ひろさあ！　今度、いっしょに行こうぜ！　世界選手権！」

「世界選手権？　なんの？」

「なんのっておめえ、陸上に決まってんじゃないか！」

「え、でもあたしは」

「観戦だよ観戦！！　おめえ、いつも城んなかにいるじゃね？　それも都会のど真ん中
でよ。そうとうストレスたまってんじゃないか？　たまには息抜きしろよ！　陸上の
世界選手権観戦なら、だんなだってダメだなんていわねえだろ！？」

「河合くん……そう……よね……」

279.

　　そうよね……と繰り返しながら、ひろは携帯電話を握り締める。「そうよねえ……河合くん……」

「そうそう、そうさ！　研修だぜー、って申請するから、交通費その他諸費用全額財団持ちだし！　な、行こうぜ！！」

「……そおね」

「おめえと陸上の世界選手権……、夢だったんだ！！　選手とトレーナーのコンビだったらバッチリだけど、まあおとなしく観戦だってかまやしねえや！！」

「……うん」

「おめえ……ホントになんかたまってそうだな……覇気がねえ……おれでよければ話してみろよ」

「河合……」ひろはいいかけて、絶句する。

「どうしたんだよ、おれ、なんかまずいこと言った？　頼むよ泣くなよ！　おれが泣かしてるみたいじゃねえか！」

「……あの頃は、良かったわねえ……！」

「はぁ？　なに年寄りみてえなことを——！」

「走って、走って、走って……！　走ってさえいれば幸せだったわ。テストできなくて成績下がったって、ぜんぜん気にならなかったわ、走ってさえいればほかのことはどうにかなったもの！！　走ってさえいれば——」

言いつのろうとするひろを河合はさえぎる。

「じゃあ、おめえ、……そんな大事なものを、なんで手放したんだよ」

「……それは……」

「やつと結婚するためだったんだろ？」

「……河合くん……！」

「泣くなって！　あ——え——まさか、やつが……??」

ひとしきりすすり泣いてからひろは話し始めた。

「夕べ、帰って来なかったの……！　一晩中待ってたのに、帰って来なかった！　昨日、私の誕生日だったのに……！！」

河合は鼻白らんだ。まずいことを聞いてしまったと思った。

「パウジーニさんは『ボスは急な用件で』っていうけど、いくら急だからって、なんで私にだまって出張なの！？　あんな綺麗好きな人が着替えにも戻らないなんて……！！」

「お、おい……そりゃ、ほんとに急用だったんだろうよ……！」

^{ボルシェ}
「車がないのよ」

「はぁ……」

「今日は私が使いたいからって、お友達と遠出したいからって、ずっと前から、貸してねって、頼んであったのに！」

「じゃ、じゃあ、もうすぐ帰ってくるんじゃない？」

「朝帰りってわけ？」

ひろのひと言は迫力があって、河合は自分が松山の立場にないことを日本の八百万の神々に感謝した。

松山健の日本での大学生時代の悪行の数々を見聞きしている河合には、今ひろを悩ませていることがあながち妄想でもない、と思ってしまうのだ――

彼女を元気づけようと世界陸上観戦に誘ったのは間違いだったかもしれない、と河合は後悔し始めた。

危険が迫っているのは松山 健ひとりではないのではないか――！？

「ひろ！ 落ち着け！」河合はうわずった声で口走った。

280.

「落ち着け……？ そうよ……私がいつまでも子供っぽいから……私に魅力がないから……でも彼は不機嫌な顔しててもステキだし、レセプション（公式の宴会）の時なんか女性がみんな彼のところに集まっちゃって男性はあっけにとられて『これでは挨拶もできない』って苦笑いされるし――！」

その現場に河合も居合わせた。新規就任者の歓迎レセプションの際のこと、『女性がみんな彼のところに集まっちゃっ』たわけでもなかった。芸術部門を統括するサーディク氏と人気と注目を二分していたのだ。

そこで河合は、ひろが並べ立てた事柄の最後の部分に「そうだな」と相づちをうった。

「河合くんもそう思うのね……！ 私は子供っぽくて魅力がないのよ……！！」

「ええっ？ いっ、いやっ……そうじゃねえよっ……！！」

＊

しかしひろはその時、爽やかな空色の和服を着込んでいて、目立たないどころではなかった、と河合は思う。

その東洋的な、清楚な初々しさに、彼女を観ていた者たちは遠巻きにして近寄れないでいた、と河合は知っていた。

こいつは相も変わらず自分のことがわかっていいねえ、というのが河合の所感だった。彼女を遠巻きにしていた者たちには、夫がいろいろが子供がいろいろが彼女は『生き生きと

清らかな乙女』なのだった。

そしてそれはそのまま、六年ぶりに再会した河合の、ひろに対する第一印象だった。
居並ぶ男性たちが彼女に注ぐまなざしの中に、なにか感動的な色合いがあるぜ、と河合は感じ取ったものだ。だから――

＊

子供っぽくみられるだの、魅力がないだの、てめえ、いったいぜんたい、どこからそんなしょうもねえ考えを引っ張り出してこられるんだ、いいかげんにしろと、思いっきり一喝してやりたいのを、口を押さえてぐっと思いとどまる。おそらく、ウィンディのえげつないちょっかいも関係しているにちがいない。

ひろは自分の魅力の無さが夫を浮気に走らせたのではないかと……前者に根拠はないが後者に、まったくない……とはいえない……疑心暗鬼に陥ってしまっている。

（だいたい、連絡もいれずに外泊なんてとんでもねえ野郎だ！！）

急な出張という、いかにも白々しい線はいつのまにか消えてなくなり、無断外泊に置き換わってしまった。

河合自身もその方がすなりうなずけてしまうのだから仕方がない。うなずける根拠は河合の胸の内にあるが、それは三万円で口止めされている。三万円といえば大金である。個人的にはひろに味方したいが、そうすると仕事と奨学金、将来の夢、財団が負担しているアパートの家賃その他諸々を、いっぺんに失うおそれがある。

河合はすばやく胸算用し、これは、ひろにはわるいが、関わらないほうがいい、と結論づけた。

すると、すばらしいタイミングでひろの携帯電話が鳴った。

ひろは、はっと飛び上がり、河合はほっと胸をなでおろす。

「出張先からだぜ、きっと」と心にもないことをいい、ひろが顔を輝かせるのをまぶしく見た。じゃあな、と手を振るがひろの心はすでに携帯電話に移っていた。

着信音はメールのものだった。「出張先からよね、きっと」つぶやきながら携帯電話をひらく。

「松山——正弘——？」

281.

昨日のうちに決済しておくべきだった書類数束に目を通してサインし終えると、真が仮眠室から出てきて歓声をあげた。「パパだっ！！」
パウジーニはボスから書類を受け取って「では！」と退出する。真は機嫌よくバイバイ、と手を振った。

「さあ、真、うちへ帰ろう。ママ、おこってるかな？」

「かもね。でもすぐ許してくれるよ、いつもそうだもん。お花はぼくが持つよ、パパはこっちのカード持ってね、かるいから平気だよ」

真は大きな花束を両手で抱え、引きずるようにしていっしょうけんめい廊下を歩いていく。前の方からみれば花束がひとりで歩いているように見え、すれ違う者の微笑を誘った。

＊

玄関のチャイムの音にひろはとびあがった。
ドアを二回ノックするのは、夫の「ただいま」の合図だ。だが立ち上がれない。

ソファに浅く腰掛け、背筋を伸ばしているが、体がこわばっていて動けない。手に携帯電話をしっかりと握り締め、その手が小刻みに震えている。

もう一度ノックがあって、外から鍵を開ける気配、次いでドアが外側へ開いた。

「ひろー……？　ただいまー……」

大きな窓から外光が入る明るいエントランスに彼女は立っていたが、棒を飲んだように体がかたく、顔には表情がない。

怒っている、というもおろか、明らかに様子がへんだ。

うちに連絡いれなかったのはやっぱりまずかったなと悔やみながら、健はもう一回、おそるおそる、「ひろー……？」と呼んだ。

真が抱えている花がほんのりといい香りをあげている。

が、ひろは足元をみていなかった。彼女にはそれは高価な香水の残り香に感じられた。つ、と一歩踏み出し、つかつかと夫に歩み寄る。

そして彼に口を開く間も与えず、いきなり右手をあげて彼の頬を張った。

感情的な平手打ちというのは力がこもりすぎていてうまくヒットしないものだが、彼女の怒りは一打をみごとにコントロールして相手を撃った。

健の方は昨夜家に帰らなかった、連絡もしなかった、あげく彼女の誕生日をすっぽかした、負い目に感じている事柄がいくつもあった。

妻が怒っているなら非はすべて自分にあるわけで、非難でもなんでも謹んで受ける気でいたから、もちろん身構えてもいなかった。

突然とんできた痛烈な平手打ちをまともに受けて、ふらっとよろめき、背中が玄関のドアにあたって、どん！ と鈍い音をたてた。

いきなりなにをするんだという抗議は彼女が吐き出したひと言でかき消される。

「最低！！」

罵声といっしょになにか飛んできた。携帯電話だ。

282.

力まかせに投げられたそれを、健はとっさに手をあげてよけた。もう少しで顔面に命中するところだった。

ひろの携帯電話は絨毯敷きの床ではねた。下がコンクリートかなにかだったら機械が壊れていたかもしれない。

投げつけたひろは体を震わせ、肩で息をしていて、完全に興奮していた。何度も息を整えてから「ばかにしないで！」と言った。

「なんなのよいったい！ あたしをだまして——！」

「なんのこと……」

健は床におちた携帯を拾おうとそろそろと体を動かしたが、ひろの方がすばやかった。ぱっと拾い上げ、なにか操作して彼の面前につきつけた。目との距離が近すぎて焦点があわず、思わず顔をしかめてそむけるが、ひろはぐいっと押し付けてきた。

「なんなのよいったい」はこっちのセリフだと思いながら、彼女の手からそれを取り、目から離して、画面をみた。そして目を疑った。

（——なんだ——これ——）

霧が一面にあたりを覆っている。朝霧にかすむ広大な緑地だということが、かろうじてわかる。夏の朝の牧場。

その中に佇むシルエットがふたつ。並んで立つひとりは男で、ひとりは女。

（このすかした男は——オレ？）

なにか言葉を交わしている。別れの挨拶だ。話は尽きず、短時間の滞在ではとても足りず、また会いましょう、と彼女は言い、右手を差し出した。それは貴婦人の身のこなしで、健は敬意を込めて手を取ったのだった。

静止画ではなく、一連の動画。霧の中ではあるが画質は良好。画面の端には今日の日付と時刻が表示されている。なんのことはない、今朝方、アルチニアが隠れ家にしている牧場を去ろうというときだ。

説明を求められればそういうことだ。

「みんなしてあたしをだまして——！　パウジーニさんも！　あなたも！　出張だなんて、ウソばかり！！　あなたやっぱり金髪のグラマーなおねえさんがいいんだわっ！！」

ひろは昨夜の夫の不在が出張などではなく、別の理由を、なぜか思い込んでしまっている。こんな画像を見せられれば当然といえば当然なのだが。それにしたって、と健は思う。こんな霧の中だというのに、なんで相手の女が金髪でグラマーだってわかるんだ？　その通りなんだけど。すごいな、女の観察眼で。

しかし怒り狂ってる妻にそんな軽口が通用するわけがない。

「急用だったんだ……」

「どんな急用よっ！！」

健はふと画像を切り替えた。

（誰かが撮って——送ってきた。ひろの携帯に——。誰——）

そこで彼はまたもや目を疑った。「正弘？」

ひろは渡欧する途中に立ち寄った日本で正弘とアドレスを交換していた。そこに送られてきたメールを警戒することなくあけたとしても、無理もない。だが……正弘は……。

めったにしないが、健は眉間にしわをよせた。

「正弘は、工作中だ」

「うそ！」

ひろはすかさず、反射的に言った。「工作中！？　そんな人がどうしてこんなもの撮っ

て！ 送ってこれるのよっ！？」

「ひろ、おまえ高三の今頃、なにやってたか思い出せる？ インターハイ真っ最中だっただろ！？ 正弘は今その取材で連日駆けまわってるんだ、こんな動画、撮ってるひまがあるとは思えない」

ひろはぐっと声を詰まらせ、それでも何か反論しようとしたとき。健は重大なことに気がついた。

「——これは——まずい！！」「——なにがまずいのっ！！」

片手でひろから逃れながら大声をあげた。「イリチャ！！ どこにいる！！ イリチャ！！」

あとがき

ここから第五部

今回の表紙、『In Brussels』と似てますね。でも『In Brussels』が高校生二人組に対し、『in the fog』はもっと大人。

ビジュアルのモデルは...あくまでビジュアルね...健は A. ドロンで、アルチニアは M. モンロー。

どーいう取り合わせかという、ひろの意識の反映です。夫はドロンのような超絶美形、浮気相手はひろの劣等感をも一れつにかきたててやまない容姿の持ち主。

モデルの写真見ながら描いたスケッチをチャット GPT に流してきれいきれいしてもらいました。ま、いいんじゃないでしょーか。ちなみに、パンテオラ様はソフィア・ローレンです。

2026 年 08 月 05 日 記

奥付

リ・コンストラクション

第二十八章 in the fog

2026 年 8 月 6 日 初版発行

著者 峯村 明 E-mail dbailai388@gmail.com

表紙素材 「写真 AC」 「Chat GPT」

制作 Puboo

発行所 デザインエッグ株式会社

I Akira Minemura 2025-2026

著 者 峯村 明
イラスト 写真AC
イラスト Chat GPT

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社